

みんなで備えるコミュニティ防災(1)

都市防災と安全・つながり・文化



森 一彦

大阪市立大学都市防災
教育研究センター所長、
生活科学研究科教授

デルタ域にある大都市は災害リスクをかかえている

20世紀初頭から始まった現代の都市化は、決して安全性を高めてはいません。今でも都市は世界各地で発展しつつあります。そこでは様々な職種の人が集まり協働することで高い技術文明を築いているものの、安全面から見るとむしろ災害リスクを高めている現実があります。上海、バンコク、そして東京と大阪、それらに共通しているのは、もともと潜在的にリスクのある河川の下流域、いわゆる“デルタ域”(下図)に都市を築いていることです。ひとたび、想定を超える洪水や地震、津波に襲われると都市機能は麻痺し、多くの死者がともなう大災害につながることは、今や自明です。

共助で災害弱者を支える

東日本大震災では死者15812人にのぼり、年齢が判明している15681人のうち60歳以上の高齢者は10360人と66・1%を占め、震災関連死も同様に平成25年3月31日時点で2688人にのぼり、このうち66歳以上が2396人と全体の89・1%を占めています(内閣府高齢者白書H25版)。とりわけ高齢者や障がい者・母子など弱者への支援につながる共助がよく求められています。国は2013年に災害対策基本法を改正し、2014年に地区防災計画ガイドラインを制定し、公助だけでなく自助共助の仕組みづくりを、国を挙げて取り組むことになりました。

コミュニティ防災で安全・つながり・文化を再生する

大阪は幸いここ数十年間、大きな自然災害に襲われていないため安心している人も多いのですが、その実、大阪の災害リスクは浸水危険地区、木造家屋密集地区など全国的にも

有数の災害危険地区を抱えています。

大阪市立大学は本年3月1日に都市防災教育研究センターを設立し、子どもや障がい者、高齢者も含む住民すべてが主体的に防災に取り組むためのコミュニティ防災の仕組みづくりを開始しました。それは防災訓練にとどまらず、災害史の編纂、地域の祭りや演劇など文化的活動も含まれます。コミュニティやまちの真の安全向上とは、人と人のつながりを取り戻し、安心で豊かな生活文化を再構築することでもあります。

このコラムでは、都市大阪におけるコミュニティ防災をめぐる、最新の科学技術と取り組みについて各専門分野の第一線の研究者が連載します。



棋河絵図
(生野区石川家蔵)より河川・水域を抜き出した中世大阪のデルタ域(作図:三田村宗樹)